

帰ってきてしまった例
のちよび鬚

べすぱにあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの男が1936年に再び蘇った！

「今度こそは」と男の奮闘は始まるが、待ち受けるのは困難ばかりだ

ちよび髭は未来を変えられるのか!?

そしてドイツを勝利に導けるのか!?

独裁者の戦いが今始まる！

目次

	1936年の始め	1
	勝つ為の改革	11
	新たな『枢軸国』へ	24
	我が軍隊	30
	開戦	37
43	新たな終わり、そして切り替えず	

1936年の始め

私は、一国の首相だ

いや、「だった」の方が正しいかもしれない

何故なら、たった今、私は自分の口に銃を突っ込んで、その引き金を引いたのだから……

おかしな話かもしれないが、自分の頭をぶち抜いた後でもこうして意識は残っていたし、周りの景色も見えた

人は死ぬとこうなるのか、ともぼんやり考えていたが、やがて一つの思いが頭を駆け巡った

「なぜこうなってしまったのだ？」

私は首相になってから民衆の願いを叶え続けた

失業率もグッと下げた

公害対策だってした

経済も好調だった

アウトバーンを作った

ドイツ軍を過去最強にまで押し上げた

悪徳ユダヤを消し去った

欧州を征服しかけた…

そもそも、なぜ私のドイツ軍が負けたのだ？

フランスを征服したところまではよかった

イギリスを攻め落とせなかったのは、なぜだ？

いや、それは無能なゲーリング&空軍の所為だ

他はよかったはずだ

それは置いとくとして、なぜ

ソ連にまで…

やつらの国は腐っていた

だから負けるはずがなかった…

やはり、全部、無能な将校の所為だ

私の計画は全て正しかった

それをやつらは…

本当にやるべきだったな、あのスターリンのような大粛清を！

腕を振りかざして激昂したいけどできないこの状況

悔しい、悔しすぎる

ふと我が妻エヴァのことを思い出した

彼女には可哀そうな事をした

ずっと待たせた結果がこれだ

1941年頃に結婚するべきだったか？

結婚式をするのであれば

シユペーアに結婚式会場を建てさせよう

スピーチには親友のクビツエク

結婚式会場を出て上を見上げると、そこにはイギリスを手にしたドイツ空軍が…

余計悲しくなった

もう時間か？

視界が暗くなってきた

デーニッツ、あとは頼んだぞ

ああ、でも、できれば、勝利を手にしたかった

ロンドンが陥落したイギリスの土を踏みたかった

スターリンが死んだソビエトで、いかに共産主義が劣っているか演説したかった
焼け野原になったアメリカで、日本人と手を取りたかった

アフリカで、ムツソリーニと食事をしてみたかった

ユダヤが駆逐された世界を生きてみたかった

なんだ、私の人生悔いだらけじゃないか

自嘲しながら意識は暗転し

ヒトラーという男の人生は終わった

【一回目】 1 9 3 6 年 4 月 3 0 日

「おはようございませす総統、少し寝すぎなのでは？」
よく聞きなれた声が聞こえてきた

宣伝相のゲツベルスに違いない

ゲツベルスも死んだのか

まああの世がどんなものかこの目で見てやろうじゃないか

私は重い瞼を開けた

驚いたことにそこは私の昔の部屋そのものだった

私はベッドに居た

ドアの近くにゲツベルスが立っていた

「流石に14時になつても起きてこないのは異常かと思ひましてね、失礼ながら部屋に入らせていただきました」

ああ、ゲツベルス、もうよいのだ

死後の世界なんだからもう少し自由にしろ

そう思い私は声を出した

「ああ、別に全然平気だ、それよりも何故お前もここにいるのだ？一緒に死ぬ必要などなかったぞ」

「はあ？総統も私もピンピンに生きてますよ、てか総統残して死ぬませんからね」

「ここはあの世だろう！ゲツベルス！1945年にドイツは負けた！私も死んだのだ！」

「総統……？」

「じゃあ何か証拠を持って来い！今すぐにだ！私とお前が生きている証拠をな！あとドイツがまだ

健在である証拠もだ！」

私は声を張り上げた

ゲッベルスは青ざめて、ナチス式敬礼をするとすぐに部屋を出ていった

ゲッベルスめ、気でも狂ったか

おや、あそこにいるのは……私の愛犬ブロンデイじゃないか！

私はベッドから立ち上がると部屋の隅にいた犬を撫でに行つた

やけに体が軽い

ブロンデイを愛でてしていると、医者を5人ほど連れてゲッベルスが戻ってきた

医者は私を半強制的に近くのソファに座らせた

「何か嫌なことでもありましたか？」

私を精神病患者にしたらしい

「特に何も！私が死に、ドイツが負けたこと以外はな！」

「ドイツはまだどことも戦争をしていません」

医者の方が反論してきた

「違う！ドイツは確かに1945年に負けた！あの憎きソヴィエト…」「少し待っててください」

別の医者が部屋を出ていった

私は苛ついていた

コーヒーを要求し

コーヒーはすぐに運ばれてきて

私はそれを飲みながら、医者を待つ

しばらくしてそいつは戻ってきて、こう言った

「とりあえずこの新聞をお読みになって下さい」

そう言うと新聞を私に渡した

読んでみた

コーヒーを嘔き出しそうになった

日付が1936年の4月30日である

これは皆が私を騙そうとしているのか

それとも理解しがたい状況がここで起こっているのか

私はすぐに立ち上がると制止の声を振り切つて部屋を出た

外に出るまで何人かのドイツ人に会つたが、そいつらに聞いても今日は1936年の4月だ、と言う

というかよく見たらここ、総統官邸そっくりである

まさか、まさか、まさか……

外に出るとドイツ人が何十人も歩いていた

それも破壊されていない市街地を、だ

私の疑念は確信に変化した

私にはもう一度やり直しのチャンスが与えられたのだ

どうしてこうなつたかは分からないが、嬉しくて飛び跳ねてしまつた

頬をつねつてみたが夢ではない

こうなつたら大改革だ

まず無能な将校を大量に肅正するぞ♪

それからそれから……

私に気づいた民衆の波に埋もれながら、そう思つていた

この時の楽観的な考えはすぐに潰れた
私は気づいていなかった

ドイツが勝利を手にする難しさを

勝つ為の改革

この世に戻ってきてから一か月程経った

今日は1936年の5月だ

私は戦争を始める前、つまり政治家として前回と同じ行動を取っている

しかしこの世界の歴史は前の時と同じように刻まれている

記憶に残っている範囲ならば、他のドイツ人の発言、行動もほとんど変わらないと思
う

もう既に生き返ったということは揺るぎない事実だ

ならばやることは一つ

ドイツに勝利を！

コンコン

「総統、お呼びですか？」

「おお、ボルマン君か。入りたまえ」

丁度呼びつけておいた私の個人秘書及びナチ党官房長官が入ってきた彼の名はマルティン・ボルマン

恰幅のよい男、まあ言ってしまうとデブなのだが意外と動きは俊敏だ

彼は私が死ぬまで忠実な男だった

未来が分かっているのです、少し早めに秘書として採用したのである

本人はいきなりすぎて面食らっていたが

「で・・・話とは何でしょうか？」

ボルマンは椅子に座ると私の方を向き、メモを取り出しそう言った

私は数枚の紙を渡した

この一か月間、何もしてこなかった訳ではない

「メモはいりませんね。では拝見します」

「見ての通り一枚目から四枚目はリスト、五枚目は人事異動のリストについてだ」

「ふむふむ、何のリストかは分かりかねますが有名人の名前多いですね。ヒムラーとかマンシュタインとか」

「人事異動については五枚目に書かれている人物を私の権限で異動させる。後で直接任命するつもりだがね」

「分かりました。で、四枚目までのリストの意味は？」

「まあ簡単に言うただね、そいつらは私にとって『気に食わない』連中さ」

「あー…。把握です」ニヤニヤ

ボルマンはにやつきながら何度も頷く

この一ヶ月間私は『肅清するべき者』を吟味してきた

ハインリヒ・ヒムラー、こいつは裏切り者である

エーリヒ・フォン・マンシュタイン、私の完璧な作戦を何度も妨害した

他の将校なども同じような理由だ

無能なゲーリングは生かしておくことにしよう

奴も裏切った、と言うが奴は一応事前に連合国との交渉について意見してたからな

無断で交渉していたヒムラーよりはまだ可愛げがある

「どのように抹消を？」

「そうだな、親衛隊のラインハルト・ハイドリヒに私の言ったことを全て伝えろ。あいつ

は必ず実行できる」

「しかし、ラインハルトの上官はヒムラーです」

「その為の人事異動だ。この二人の地位は3日以内に変わるだろうよ。肅清は半年以内には必ず終わらせろ、とも伝えておけ」

ボルマンはしばらく肅清リストを見ていたが、失礼します、と一言言うとは部屋を去っていった

1936年6月2日

ラインハルトが親衛隊全国指導者に任命され

ヒムラーが『名誉指導者』という新しい地位に左遷された

そこからはとても速かった

まず、肅清リストの者たちにスパイ疑惑がかかる

そいつらの大半はそれを無視したり反論したりした

始めのうちは国民も皆彼らに同情的だった

次に、ラインハルトが偽造、捏造した大量の『証拠』を新聞などに提出した

新聞はすぐにそれを掲載し、ニュースはそれを大袈裟に報道した

国民は感情的になり即刻排除を求め始めた

実際、リンチで数人が死亡

やがて保安警察が動き始める

当然である、そのトップがラインハルトなのだから

1936年の9月には裁判及び肅清は全て終わっていた

マンシュタインなどはあっけなく処刑、ヒムラーは裁判の為の拘留中に自殺した

因みにこの数か月間、私は何をしていたかというところ

く
ド
イ
ツ
海
軍
司
令
部
く

くドイツ陸軍司令部く

「グデーリアン君、君を陸軍元帥に任命しよう」
「え、マジすか？いきなり？」

くドイツ空軍司令部く

「ケツセルリンク君、君を空軍元帥に任命しよう」

「あ、そうですか」シヨルイカキカキ

「ゲーリングと一緒に頑張ってくれたまえ」

「分かりました」カキカキ

「ゲーリングには言っておいたから」

「左様ですか」カキカキ

「では私はこれで…」

「さようなら」カキカキ

「……」スタスタ

「……」カキカキ

「……」ピタッ

今回はいい流れだ

裏切り者を事前に排除し、有能な人材を元帥その他諸々につけることができた
ラインハルトにはあとで礼を言わねばな
さて1937年はどうするか…

ドイツにふさわしいメンバーを決めようか
今度こそ真の『枢軸』を作るのだ

新たな『枢軸国』へ

その日、久々に私は大変な夜更かしをしてしまった

壁に掛けてある時計を見てみると、大きな針は10を小さい針は3を指していた

午前3時50分まで起きていたのは本当に久しぶりだ

まあ、それも仕方あるまい

今考えていたのは、我がドイツの盟友をどうするか、という放っておいてはならぬ問題だからな…

ようやく、私は、長い間考えた末の結論をもう一度思い浮かべた

まず最初に思い浮かんだのは同じイデオロギーを持つ国

イタリアだ

この国をどうするかは私は悩んだ

だが、今回はイタリアを排除することに決めた

よくよく考えたらみたらあの国は第一次世界大戦にてドイツを裏切ったではないかそれにロンメルが言うには、イタリア兵は役立たずだったそうじゃないか

よってイタリアはドイツの盟友には相応しくない
あいつらは結局パスタ野郎だったのだ！

次に日本

最早、結論は一瞬で出た

『相応しい』

この国は最後までドイツについてきてくれた
確かに、前回はソ連に侵攻してはくれなかった
しかし、アメリカには立派に戦ったではないか
距離が遠すぎるのが難点だが、それは後で解決すればよい

ハンガリー

これもまた相応しいだろう

奴らはドイツにとってなくてはならない油田というものを持っている
縁の下の力持ちとして、奴らはなかなかいい働きをした
今回は積極的に協力しなければな……

ブルガリア

論外だ

ヨーグルト野郎め！

ルーマニア

これが一番悩んだ

こいつらはイタリア兵並みに動きが鈍い

しかし、大きな油田を持っている

小一時間悩んだ末、ポーランド侵攻に伴ってルーマニアも侵攻しようと思った

友好関係を結んだ上でな

ユーゴスラビア

よし、入れよう

前回は残念な結果に終わってしまったが今回はいけるはずだ

ルーマニアへの侵攻も楽になる

今回はどうやって圧力をかけるか…

フィンランド

ソ連侵攻にあたり、あの国は重要である

だがフィンランドは強い癖に戦争自体に消極的だ

上手くソ連に焚き付けたいものだが

保留しよう

スペイン

無理だな

前回は誘ってみたがフランコに

「経済的に可能になったら行きます」とか言われてしまった

同じイデオロギーを持つ者同士としては非常に残念である

ならば…逆に考えよう

どうやったら枢軸国にくるんだ？

これも保留…

私は一通り思い浮かべると、欠伸をした
今日はもうそろそろ寝ていいはずだ
ベッドに向かう間もなく私は眠りについていた

夢を見た

スターリンがこちらを見て大笑いをしている

私が怒って銃を取り出すとそれはムツソリーニに変わった

ムツソリーニはこちらを見ると泣き出した

「楽園への切符はないのだ、ドゥーチエよ」

私はこう声をかけた、しかしムツソリーニは泣き続けた

「違うよ、それは」

ふと肩を捕まれ、誰かからそう言われた

「何が間違っているのだと言うのだね！言ってみろ##\$%%&&*!!!」

私はその声の主を知っている

しかし名前を言うと、それは雑なノイズに変わった…

振り向こうとしたところで目が覚めた

変な夢を見てしまったな

外は日が昇っているようで、部屋に光が差し込んだ
妙に神々しかった

窓に向かい、窓を開け、外を見る

久しぶりに太陽を見た気がする

夢の影響もあつたのか、思わずこう叫んでしまった

「私は自分の手で楽園を作り上げてみせるぞ！ユートピアをな！」

だが、私の気持ちは晴れることはなかった

時期は1937年5月のことだった

我が軍隊

1938年2月になった

時が経つのは本当に速いものだ

一ヶ月後にはドイツと一体化するであろうあのオーストリアは目まぐるしく動いている

実にご苦勞なことだ、併合は殆ど決まったようなものである
ハンガリー、日本に対しては接近を続けている

ユーゴスラビアとフィンランドに関しては『圧力』という名の接近だが

「ハイル・ヒトラー、空軍元帥のケッセルリンク氏が来しました」

ボルマン君がノックもせず私に私の部屋に入ってくる

ああ、そうだった

今日は陸海空軍の状況について聞きたいことがあったのだ
しかしノックもなしに入ってきたので、そこは叱っておこう

「あ… 失礼いたしました、つい急いでて…」

「まあ誰にも間違いはある。これからは気をつけるように」

「はい…」

「で、ケッセルリンク君は？通してもいいぞ」

ボルマンはささっとその場からどく

その後ろから優しい笑みを浮かべたケッセルリンクが現れる

「こんにちは、総統。早速ですが…」

アルベルト・ケッセルリンク

愛称は「微笑みのアルベルト」

その愛称の通りに穏和な性格である

空軍の再建に尽力し、航空機をよく理解し

空軍の将官にも関わらず陸軍の指揮官としても非常に有能

前回のイタリア戦線では素晴らしい程の活躍をしてくれた

「総統？聞いてますか？」

「あ、ああすまない。聞いてるよ」

「まあそんな訳で：： B f 1 0 9 を捨てて F w 1 9 0 を主力戦闘機にしたいんですが」
「構わんが」

「あと J u 8 7、つまりスツーカーもそろそろ次世代に更新したいんですが」

「!?', それは駄目だ! ルーデルが：：」

「ルーデルとは?」

「あ、いや、何でもない、好きにしてくれ」

「そうですか。では許可ももらいましたし私はこれで」

満面の笑みを浮かべてケッセルリンクはその場から立ち去った

私が一回死んだがタイムスリップした、と言っても誰も信じてはくれないだろう
哀れなルーデルよ：：

「ハイル! ヒトラー! 失礼します、総統閣下!」

「おお、グデーリアン君か、入り：：」

ハインツ・グデーリアン

電撃線を考案し、実践した男

勇猛果敢で前線に自ら赴き

見事な手腕で敵を撃破する

性格面では、非常に癖がある

簡単に言うときかん坊90%冷静さ10%

自由気ままでもあり、実際ノックもせず私に私の部屋に入り、勝手に話を始めている
前回もかなり彼とは衝突したが

ほとんど口先だけのマンシユタインと比べればそんなことは気にならない

「じゃあ！頼みますよ総統！」

勝手に話終わり勝手に出ていった

なんかとんでもない数の戦車を注文されたが…

彼の言うことだ、間違いはない

「ハイルヒトラー、総統、失礼しても？」

「デーニッツ君か、どうぞ」

礼儀正しくノックをし、海軍元帥のデーニッツとしぼんでいるレーダーが入ってくるデーニッツからされる話は大体予想できている

「総統、大型艦艇の話なんですが」

カール・デーニッツ

『群狼作戦』を実行

Uボート艦隊の司令官を勤めていた

有能なのは勿論、性格面でも素晴らしいの一言である

カリスマを持ち、指導者としての資質があり

まさに私の後継者にピッタリの男だ

彼にもっと早く海軍の全権限を委ねればよかったと何度後悔したことが！

「総統：…あの：…」

今喋ってる男は

エーリヒ・レーダー

大艦巨砲主義野郎である

以上

「総統、はつきり言うと、大型艦艇の建造は中止するべきじゃないかと：…」

「え？」

デーニッツの言葉に度肝を抜かれた

彼からはUボートの生産に関する話だけがされると思っていた

そもそも彼はUボート至上主義では… なかったな

前回もそれについて言い争った

しかし、今考えるとそれはレーダーの根回しだったのかもしれない

いや、そうだ

「いや、中止にする。これはもう既に決まったことなのだ」

「しかしですね…」

「駄目だ。Uボート一択だ」

「はあ… せめて空母だけでも…」

「駄目だと言ってるだろう！」

「… つ、分かりました。失礼します」

二人が去っていく

私はその後ろ姿を見つめていた

二人もいつかは私の判断こそ正しかったのだと知るだろう

そうして私は勝利の恍惚感に浸っていた

開戦

1939年、7月

時期がちよつと早いようにも思えるが
遂にこの時がやってきた

ポーランド侵攻だ

前回もポーランド侵攻から始まったな

ダンツイヒか、戦争か

やつらは愚かにも戦争を選んだ！

当然、すぐに叩き潰した

西にドイツ、東にソ連

ポーランドに逃げ場は無かった

私にも計算の狂いはあったことは認めよう
フランス、イギリス

この二国は、チエコスロバキアの時のようにポーランドを見捨てるだろうと予想していた

だが、実際は国としてのメンツを保つために、ドイツに盾ついてきたのだ

フランスはポーランドと同じように、惨めに負けた

しかしイギリスは違かった

やつらの抵抗は頑強だった

バトルオブブリテン！ドイツ空軍が勝っていれば！

「白色」作戦、いつでも可能です」

私の側近のうちの一人がそう囁く

今回もポーランドは戦争を選んだ

彼らには、もうすぐ悲しみの手紙が届くだろう……

今回の準備はもう済ませてある

ユーゴスラビア連邦、フィンランド、ハンガリーは既に親ドイツ

ハンガリーとユーゴスラビア連邦とは同盟も結んだ

独ソ不可侵条約も既に締結済みだ

日本とはまだ同盟を結んでいない

しかし、日中戦争が終結しそうではあるので、そう遠くはないだろう
当たり前だ、中国にはもうドイツの要塞は無かったのだから

「よし・・・」

私は深呼吸をした

国境には空軍、陸軍が待機している

後は自分の決心・・・

だが、私は迷わない

”白色” 作戦開始！奪われた地を取り戻せええええええ！
いぎ、開戦だ！

「また負けるのか．．」

「誰だ!？」

私は後ろを振り向いた

妙だ、後ろには誰もいなかったはず

側近もたつた今出ていったはず

嫌な予感を交えながら、振り向き終わる

そこには

「アートルフ：： 君は：： 勝てないよ、世界に」

××
××
がいた

△の前、夢に出てきた奴と同じ声、同じ姿をしていた
だが、なぜだろう

こいつの名前も、記憶もあるような気がする
それが、出てこないのだ

「なぜだ!?なぜそう思うのか!？」

「君はね：： まあ、自分で気づいた方がいいか」

「おい!?どこに行く!?おい!」

そいつは驚くことに壁をすり抜けてどこかに行ってしまった

私が怒鳴り声を上げてても、部屋には唯一人、中年がいるだけだった
激しい動悸が襲う

何かを：： 何かを：： 大切な何かを忘れている気がする：：

根本的な何かを：：

一週間後、ポーランドは降伏した
フランス、イギリスも宣戦布告してきた
だが、ここで一つ
歯車が狂った

ソ連も宣戦布告してきたのだった
そして、イタリヤも

新たな終わり、そして切り替えます

1943年、3月3日、ドイツは再び敗北した

訳？簡単に言うとは

ピロシキとパスタの所為である

四年前、我々はあっさりとポーランドを征服した

グデーリアンのお陰か、前回の征服の時のタイムよりも縮まったとも思える

私たちは再び、勝利に浮かっていた

この光景が二回目であることは私だけが知っているだろうが、その光景は前とほとんど

変わらなかった

次に頂くのはルーマニアだったはずだ

これには、確かまだ、侵攻に反対している将軍がいたが、私は構わず侵攻命令を出した

ルーマニア軍は予想以上に弱く、一週間で敵はほとんど総崩れとなり、あともう数日あれば

トランシルヴァニアを攻略できたはず……だったが

その時だった

ソヴィエト社会主義共和国連邦が宣戦布告してきたのは

理由は幾つかある

第一に、恐らく、前回と違ってスターリンは、ドイツを常に警戒していたこと

第二に、ドイツがルーマニアに宣戦布告したことで、明らかに

「次は我々の可能性がある」と判断したこと

第三に、ポーランドを一国分手に入れ、ドイツを蹂躪するには、今がチャンスだと思っただろう

この国が、自分の利益を追求するダークホースということを私はすっかり忘れていたのだった

まあ、しかし、ソ連軍もポーランドのワルシャワの一手手前で補給線がプツリ切れ東部は前回以上の泥沼、いや阿寒叫喚の地獄と化していた

敗戦の決め手となったのはあの Pasta と言っても過言ではない

やつらは狡猾なことに、ソ連軍との戦闘が完全にドロドロになった頃つまり、1941年に、ドイツに対して宣戦布告してきたのだ！

イタリヤに対してはまるでUボートが役に立たなかった

デーニッツにも言われたが、地中海までの距離が遠すぎるのだから行けないことはないが、今回は前回と違う

「イタリヤ」という最適な港を私たちは持っていなかったのである

しかも、やつらは空母を完成させていた

どうやら、今回は対英戦を考えていなかったらしく、航空技術の発展に費やしたらしく

い

陸については、完全な不意打ちだったため、一時期はえぐられるように本土を

削り取られたが、師団を幾つか投入すると、逆に推し返すようになり

1942年1月には国境までやつらを押し返せた

しかし、また幾つかの戦いで負けるようになった

理由はすぐに分かった

イタリヤは別の国から武器を供給し始めていた

その国はフランス、イギリスだった

それに気付いたころはもう遅かった

「まやかし戦争」であった西部戦線から、イギリスとフランスの連合軍が一気に押し寄せ

こちらの師団は総崩れ

敗北の時はまた迫り始めていた

こんな事を考えながら、また私は銃を口にくわえている

また自殺するのだ

ただし、外で鳴り響いている砲撃音は、今回はフランスのものであった

これほどまでに、イタリアを憎らしく思ったことはない

あの国は、どれほどドイツの発展を妨害、浸食すれば気が済むのだろうか

因みに、三日前に、ロンメルの師団がイタリア軍に降伏したということを聞いた

向こうの師団を指揮しているジョヴァンニ・メッセという男は、今や我が国のかつて

の英雄も

喰らっていた

しかし、一番地味に悲しかったのは、日本が宣戦布告をしなかったことだろう

日中戦争を終わらせた日本は、早々と、陸軍の強化のために、また引き籠ってしまっ

ていた

そして私はまた引き金を引く
今度はいもう戻れないと思つていた

【三回目】

コンコン

「總統、失礼します」

この私の部屋のドアをノックする音が聞こえてくるまでは